

The one Naming a Gentleman

紳士なオークを



【小説】story work 緑
【イラスト】illustration work キンタ

目指します

試し読み版

第一章 旅立ち

醜い豚顔。肥え太った体。半径三メートルは近寄れない体臭。

それがオークです。豚人間です。人間である要素は二足歩行と下半身の槍くらいしかありませんが、なぜか豚人間と呼ばれます。

ぼくが思うに、欲望に忠実だから豚人間と呼ばれるんでしょうね。人間って怖いですね。

思考の半分を性欲、残りの半分以上を食欲で満たしているオークに生まれたぼくですが、父親とは違ってなぜか性欲食欲以外にも思考を割くことができますようです。

おかげで知識を蓄えることができました。もつとも、その知識の元はぼく以外のオークが連れてくる人間たちの所有物だけなので、頭がいいとは口が裂けても言えません。

さて、そんなぼくはいま、人間たちが捕まっている牢屋の前に来ています。

錆びた鉄格子はいかにも不潔そうで、触るのだって躊躇ためらってしまうくらいです。でもそれだけなら我慢できます。いちばんひどいのは臭においです。

オークの思考の半分は性欲でできています。なので当然、彼らは常に下半身をイキリ立たせています。でも不幸なことに、オークにメスは生まれません。ではどうやって性欲を解消するのか。

答えはひとつです。どこからか連れてくるんです。連れてきて、この牢屋に入れて、楽しみたいときだけ鍵を開けてはハッスルして帰る。

たいした性欲魔人だと、同族ながらに呆れてしまいます。

連れてこられたメスは毎日のように襲われてしまうので、逃げる体力なんて当然ありません。それどころか、豚面の化け物に犯されているせいで精神を病んでしまうメスが続出します。

おっと、いつまでもメスだと呼ぶのは失礼ですね。女性です。人間の女性。

オークはアホですから、いつの間にか牢屋が空になっていても気づくことはありません。なのでぼくは隙を見て、人間の女性たちを逃がすことにしています。

ぼくはほかの仲間のように、性欲に狂ってはいないのです。確かに興味はありますし、女性の艶めかしい肢体を見ると本能が疼くこともあります。

でも、無理やりなんて紳士じゃないのです。

ぼくは、連れてこられた人間の持ち物に絵本を見つけたことがあります。

その絵本は、真の紳士がなんたるか、ということが描かれていました。シルクハットに燕尾服えんび。種族柄、体格の大きいぼくではそれらを着用することはできませんが、心は紳士になろうと決めているのです。

だから困っている女性には手を差し伸べます。

牢屋の扉を開けたオークを見て、裸でうずくまっていた女性がまたか、という顔をしました。あきらめが漂っていて、体にこびりついた液体が痛々しいです。

拘束具の類がつけられていないのは、オークがアホだからです。とりあえず閉じ込めておけばいいだろう、なんて思考ができるだけでもぼくは驚きでした。

怯えとあきらめが混じる女性がひとり、牢屋の隅からゆつくりと出てきました。ほかのオークがさんざつばら暴力を振るつたので、抵抗は無意味だと理解している様子でした。

褐色肌で肉感的な女性にそられるものがありますが、ぼくは紳士です。目の前までやってきた女性に、ぼくはボロ布をかけました。もともとはちゃんとしていた服を渡したのですが、ほかの性欲魔神たちが辛抱たまらんと破り捨ててしまうのでこんなものしかないのです。事前に洗っておいたので、臭いはいないと思います。

「綺麗な服の類はないのでこれで我慢してください」

「え……？」

しゃべるオークを初めて見たようで、女性は驚いた顔をしていました。流暢りゅうたうにしゃべれるのは練習の成果です。以前にも、捕まっていた女性を助けるときにしゃべったのですが、片言だったので怯えさせてしまったようでした。

「いまのうちに逃げてください。ほかのオークたちは疲れて寝てますから、いまのうちに」

両手を挙げて敵意がないことを示しても、女性はぼくを睨にらんだままです。当然だとは思いますが、がんばって言葉を覚えた身としては少し悲しくもあります。

罨くだと疑っているようでしたが、ぼくが動かないとみるや、女性はぼくたちの住居から出ていきました。

うん、これでぼくも紳士に近づいたと思う。

褐色の肌が見えなくなるのを見送ってから、ぼくは壁の隅に隠しておいた愛槍を拾い上げます。じゃあ、壊れてしまった女性たちを助けにいきましようか。

濃密な鉄の臭いが鼻腔を刺激しますが、もう慣れてしまいました。

精神が壊れてしまった女性を救うついでに、彼女たちをこんな目に遭わせたオークたちにお仕置きをしてから、ぼくは巣を出ました。

いろいろと準備してきたおかげで、今日からぼくはひとりだけで生きていくことができるはずで、性欲魔人のオークとは違う、紳士なオークをぼくは目指そうと思います。

*

住処すまかだった穴倉から離れて、ぼくは森の中を歩いていました。

ここはよく肉を獲るために足を運んでいたので迷うことはないけれど、少し厄介な種族が根城にしているんです。

エルフ。

耳が長くて、ぼくたちオークの性欲が最大限に引き出される美貌の麗人たち。

森と生き、森と死ぬ彼女たちはオークを虫のごとく嫌って、姿を見るだけでも矢を射掛けて

くるのです。

とはいえ、それは決して理不尽な行為ではないのです。

オークにとって、エルフはいちばん強い欲情の対象です。そのせいでひとりであるエルフは軒並みオークにさらわれてしまうのです。もちろん、ぼくはそんなことをしませんが、オークはオーク。ぼくも彼女たちの敵なのです。

なので、ぼくは深緑色のクロークを羽織って、豚の顔をフードで隠しています。夜のいまなら色がカモフラージュになるでしょう。

しばらく歩いていると、木の根元になにかが転がっているが見えました。近づいてみると、なんとエルフの少女が倒れていたのです。

暗いせいで容姿はわかりませんが、尖った耳が特徴的です。あまり顔を見ないようにしながらエルフに触れてみると、しっかりと息をしています。

ぼくは気づきました。

この少女の片耳、半ばからちぎれています。

エルフにとって、尖った耳は魔力の収集に必要不可欠な部位であるほかに、彼ら種族の誇りで、片耳でも失ったエルフは集落から追い出されてしまうようです。

おそらく、この少女は片耳を失ってしまったがゆえに追い出されたのでしよう。

排他的な種族であり、内外どちらにも敵しいのがエルフです。魔法が使えない、耳がない、など、欠陥がある仲間は容赦なく切り捨てるのでしよう。

見たところこの少女の耳は今日の朝ごろにちぎれてしまったようで、痛々しい傷口が覗いています。にもかかわらず、少女の仲間であったはずのエルフは治療するどころか、彼女を追い出したのです。

しかも、それだけではありませんでした。

耳の治療をしようと少女を抱きかかえると、痛がるように身じろぎしたのです。もしやと思つて触診すると、あちこちの骨にヒビが入っていました。

元仲間のエルフたちは、この子を痛めつけてから追放したのでしよう。

彼らを破滅させるのはあとです。いまはこの子の手当てをしなければ。

ちぎれた耳を、人間が持つていた救急キットの包帯で止血してから抱え上げます。

かなり軽いのは種族柄でしょうか。ぼくはなるべく揺らさないように少女を運んでいきました。

人間が又又大森林と呼ぶこの森は未開拓の土地です。エルフやオーク、そのほかにもさまざまな種族が暮らしている森ですが、人間だけはよそからやってきます。

なんでも、大量の木々と未知の存在が跋扈するこの土地は、人間にとって魅力的だそうなの。そのため、冒険者という職業の人間が依頼を受けてやってくるらしい。ぼくの仲間はその人間たちをさらつてみたいのです。

要領を得ないアホな仲間の言葉をがんばって読み取ったので、あまり詳しくは知りません。ただ、仲間が人間をさらってきたように、見目麗しいエルフをさらう人間も多くなっているようです。ぼ

くにそのことを教えてくれたオークは、性欲処理の相手が増えて嬉しそうです。

人間にとつて未開の地であるこの森も、ぼくら森に暮らす種族からすれば庭のようなものです。とくにぼくは、暇さえあれば女性相手に腰を振る仲間たちとは違って遠くまで調べていました。森から出る道も知っています。

エルフの少女を抱えてやってきたのは湖畔です。窪地に存在しているので、知る人ぞ知る、といったところです。

雨をしのげそうな木のうろを見つけて少女をその中に寝かせました。巨木ですがぼくは体が大きいので入れそうにありませんでした。

見つけた当初より具合が悪そうな少女は高熱を出していました。全身の打撲のせいでしょう。綺麗な布切れを荷物入れから出して、湖に浸して少女の額に乗せました。

しばらくはここで看護することになりそうです。

『紳士の心得。困っている女性や子供には手を差し伸べよう。紳士への第一歩です』

第二章 偶然の出会い

ぼくがその本と出会ったのは本当に偶然で、一步間違えれば別のぼくになっていたことでしょう。別のぼく。それはすなわち、オークらしいぼくです。

食欲と性欲が混ざっているような、下半身でものを考えているような、そんな存在になっていたかもしれません。

仮にオークらしくなっていないなくても、いまのぼくには絶対になれなかったことでしょう。

淫靡いんびな空気に満ちた穴倉に耐えられずに、外で気分転換しようと思いついたときです。

最近、人間の女性が捕らわれてきて、それからは毎日のように激しい情事の音が寝ても覚めても続いていました。

いくら生まれたときからともにいるとはいえ、同族の下半身をいつまでも見ていたわけではありません。しかも、どういうわけかぼくは仲間たちとは違って、自制ができるようなのです。もしかしたら、毎日のように繰り返られる仲間たちの交尾へんたいに、辟易へきえきとしたものを感じたのかもしれませんが、捕まった女性には、とくになんら感情は覚えていませんでしたが、毎日毎日、性欲旺盛なオークの相手をさせられるのはさすがに可愛いそうと思えてきたところでした。

穴倉を出る際、仲間には小さいものを処分してくれ、と手渡されたものがありました。

ぼくたちが使うには小さい人間の男用の衣服が数枚に、びりびりに切り裂かれた女性用の衣服。

それに、本と呼ばれる紙束です。

仲間たちはこういった人間の持ち物に興味がないらしく、使うも捨てるも好きにしろとぼくにすべて渡してくれます。その代わり、いつも取り合いになる人間の女の下着というものを譲っているので、当然といえば当然かもしれません。

先に衣服を適当な穴に埋めて、切り株に座りました。

勉強してはいましたが、人間の言葉は複雑であり使いこなせてはいません。

仲間たちは人間の文化というものに興味はないようで、女の尻ばかりを追いかけていました。

今日見つけた本は絵ばかりが描かれていて、たいへん読みやすいものでした。

『しるくはつと』とかいう縦長の帽子に、『えんびふく』という、尻尾のようなものが飛び出た人間の服に、『すてつき』という柄の曲がった杖。

これらを身に着けた『しんし』という存在が、世界中の女を、いえ女性を助けるお話でした。

ぼくは、この絵本に天啓というものを得た気がしました。

だって、格好いいじゃないですか！

泣いている女性の涙を止めるため、明日に絶望する女性の未来を守るため、『しんし』はどんなことにも立ち向かう。それはたぶん、ものすごくたいへんなことなのでしょう。

ですが、ぼくはその生き方がすごくすごく、格好よく見えたのです。

ぼくたちオークは、確かに女性を大切にしない種族です。それどころか、女性の泣き顔にたいへん興奮して、ますます燃え上がってしまうような困った種族です。それはたぶん、性癖としては誰

にだってあるのだと思います。

ぼくも、最初はなぜオークが嫌われるのかわかりませんでした。

しかし、考えてみれば当然です。

オークは泣き顔を求めています。ですが『しんし』は違います。決して泣き顔を求めたりはしません。受け止めようとします。

その結果、『しんし』は求められるのです。此ま細こなようであつたく違う、『求めること』と『求められること』。

その違いが、ぼくたちをオークたらしめているのではないのでしょうか。

この絵本には、『女性は宝を生み育む存在である。次代への花を咲かせるのは女性にしかできないこと』と描かれていました。

そうです。ぼくたちオークにはメスがいません。種を守るには、女性の存在が必要不可欠なのです。もし仮に、この世界に女性が存在しなかったときは真つ先にオークが絶滅するでしょう。

そうでなくても、女性を泣かせることは格好悪いことだと思えます。確かに胸が熱くなることもありませうけど、余計に泣かせたいとは思えません。

仲間たちは女性の泣き顔が大好きなようですが、そんな仲間たちと暮らしていたことで反面教師にしたのかもしれない。

正直なところ、ぼくにもわかりませんでした。ですが、『しんし』の生き方は、目指してみたいなるくらい憧れるものだったのです。

第三章 エルフのミユケ

ぼくがエルフの女の子を見つけてから、三日が経ちました。

そのあいだ、ぼくは彼女の看病をして過ごしていましたが、何度も危ない場面があつて困りました。

エルフの美貌はオークの性欲をこれ以上ないほど昂^{たかぶ}らせます。意識的に顔を見ないようにしていましたが、寝返りを打つ少女の首筋が露わになったときや、大量の汗をふき取るときに触れた肌の感触は危ういものでした。

おかげでぼくの額はいまま乾いた血が貼りついていきます。

そういえば、このエルフの女の子はすでに成人しているようでした。首筋から鎖骨のあたりにかけて三角形の痣が浮かび上がっていると、成人しているという証になるそうです。これは仲間が教えてくれたことですが、彼らは本当にエルフのことには詳しいです。

懸命に看病したおかげか、少女の熱はだいぶよくなったようで、いまだ目を覚まさないながらもすりつぶした果物や飲み水はしっかりと嘔^{えんげ}下してくるようになりました。

湖の水で濡らした布を少女の額に乗せて、愛用の槍を手に取りました。

狼です。

弱っている者の匂いをかぎ分けることができる森狼は、病人の天敵です。とくに、いまのエルフの少女のように寝たきりの者は格好の獲物でしょう。

これで森狼が襲ってくるのは六回目です。

幸い、少数で襲ってきたのであっさりと倒すことができました。はぐれだったのでしょうか。眉間を貫いた槍を引き抜くと粘着質な脳漿がずりと溢れてきます。

森狼の肉は筋肉質で食用には向いていません。血の匂いでほかの獣を招きかねないので、森の奥に捨ててきましょう。

湖畔に戻ると、エルフの少女がいませんでした。うろの中で寝ていたはずなのですが、姿も影もありません。まだ起き上がれるような調子ではないはずなのですが……。

「あーっと、ぼくはあなたに危害を加えるつもりはありません」

「信じられるとでも？」

首元に突きつけられたナイフが鈍く光っています。

さすがエルフです。まったく心配を感じませんでした。流暢に話すぼくに驚く心配がありました。隙になるほど大きな動揺ではありません。人間とは違ってエルフはオークが少なからずしゃべれることを知っています。

背後からはすさまじい殺気が送られてきて、危うく槍を突き出してしまおうところでした。

「ここはどこ？」

「森の西にある湖ですよ。倒れていたあなたを見つけて、ここまで運んできました」

「誰かが看病してくれてることは知っていたけれど、まさか下種豚だったなんて……」

オークに看病されたことがそんなにショックだったのでしょうか。それとも、眠っているうちにあれやこれされたと勘違いしているのでしょうか。

ぐいと、首にナイフがめり込みました。

「豚に汚されたとあつてはもう生きていけませんね……せめて道連れに」

やっぱり勘違いしてるようでした。

「あの……ぼくはその、なにもしてませんよ？」

言ってから後悔しました。誰がオークの言い分を聞いてくれるというのでしょうか。相手は豚嫌いで有名なエルフなのに。

「確かにぼくはオークですけど、なにかしていたらあなたはいまごろ檻の中ですよ？ 少なくとも、

ぼくの仲間はそうするはずです」

「それは……」

「ぼくが普通のオークなら、あなたはもうぐつちやぐつちやでどろっどろになって動けないと思います」

性欲魔人であるオークなのに、自分の体は綺麗でなにかされた形跡もないのです。信じざるを得ないでしょう。あとひと押しです。

「ぼくはオークですが、紳士を目指しています。合意がないのに乱暴なことは絶対にしませんよ」
沈黙があつて、少女はナイフを離してくれました。ただ、大笑いしているのが腑ふに落ちません。



第十二章 悪役にはもってこい

紳士として、いえ、男として、スクレットさんもなにか感じることがあるのか、静かに涙を流すフェーレさんをじつと見つめていました。

貴族には関わらないと決めているスクレットさんが同席していることですら、自らのポリシーを曲げている真つ最中だということに気づいたのは、きつとぼくだけでしょう。

彼の貴族に対する感情は、憎悪なんて生易しい言葉では片付けられないほど複雑で、くすぶつているようでした。

人間が言うところの、魔獣であるぼくが人間の心を理解しているなんて口が裂けても言えませんが、それでもわかることはあるみたいです。

人間は誰もが悩んでいる。葛藤して、毎日を生きているようです。寝ても覚めても股間を膨らませるばかりのオークとは大違いです。

誰もが黙り込んでしまったとき、スクレットさんが唐突に口を開きました。

「とにかく、そろそろごはんにしよう。僕は外で枝を拾ってくるから、そっちのオークくんも手伝ってもらえないかな？ ふたりのほうが早く終わるし、美味しいものもご馳走できるんだけど……」
食事で気が引けると思ったのでしょうか。ぼくの仲間たちならともかく、そこまで単純ではありません。

「たくさん作るには枝が多く必要だからね」

拾ってきます。

*

孤児院で毎日料理を作っていた、というフェーレさんが調理を担当し、作る気満々だったスクレットさんが少々肩を落としながらおとなしく食事を済ませていました。

フェーレさんの料理はいままで食べてきたもののどれよりも美味しくて、凶々しくもおかわりなどしてしまいました。フェーレさんはばくばくと食べるぼくにほほ笑んでいました。なぜでしょうか。

今日はこのまま、ぼくを含めてスクレットさんの小屋に泊まることになったのですが、この小屋はもともとひとり暮らしを目的としていて、四人が横になるのは無理でした。

体が大きいぼくは当然外で、スクレットさんが女性ふたりは疲れているだろうから、と自ら外で眠ることに決めていました。彼もまた紳士ですね。

きやつきやと楽しそうな声が漏れてくる小屋に、悲壮感でいっぱいだったフェーレさんも少しは元気になったようでした。

ひとつしかないハンモックは家主であるスクレットさんが使い、ぼくは慣れているので手近な木に登って太い枝に体を倒しました。

「それにしても、人間という種族にもいろいろあるんですね」

独り言のつもりでした。

「魔獣は、いや失礼。オークも集団で暮らす種族だと聞いたことがあるけれど、人間のように暮らすことはないのかな？」

「オークは、とにかく仲間意識が強いです。同じ穴倉で育った仲間はみんな家族で、誰かが襲われたら全員で仕返しに行くことだっていつものことです。……だから、少し驚いたんです。家族なのに、人間は助け合わない。ぼくはそれに驚きました」

「普段魔獣だと忌み嫌い、蔑んでいるきみたちのほうがよっぽどつながりを大切にしているんだね。人間に血のつながりを求めるのは酷だけど、せめて肉親くらいは信じていたかったよ」

信じていたかった。その言葉の意味はぼくにはわかりません。

でも、ひとつだけ。スクレットさんも、肉親に裏切られてしまった人なのでしょう。権力が強ければ強いほど、人間は求める生き物だと、哲学書に記されていました。あながち間違いではないのかもしれない。

「あの、スクレットさんはどうして強くなったんですか？」

人間のあいだでは有名な剣聖。なんのために強くなったのでしょうか。

「どうして、か。ひさしぶりに聞かれた気がするね。……そうだな。ぼくの住む村は、国境近くにあったんだ」

「それは、戦争をしたという隣国との国境ですか？」

「そうだよ。ぼくは幸いにも剣の才能があったみたいだね。剣の師匠ができると、すぐに追い越し

てしまったよ。いまよりも上に、もつと強く、つて高名な剣の剣士に弟子入りして、いつの間にか
いちばん強くなっていた。それからは簡単だよ。もともと剣を習ったきつかけは家族を護りたかつ
たからだ。戦争前は魔獣がよく襲ってきてね。相手が兵士になっただけで、なにも変わらなかった。
だから、僕は隣国の王様に直談判しにいっただけだ」

「よく、無事で帰ってくれましたね」

「気さくな人だったよ。身構えていたことが阿呆あほうらしいくらいにあっさり兵を引いてくれたんだ。
護るために戦う男は宝石よりも価値があるって。ああ、この国は宝石がよく採れてね。宝石の価値
が高いものだから、なにかと比べられるんだ。僕はよくわからないんだけど女性が憧れてやまな
い土地なんだって」

「なるほど……」

「そうして帰ってきた僕は、とある貴族に腕を振るわないかと誘われて、村が護られたことだけで
満足だった僕は断った。そうしたら、家族どころか村がなくなっちゃったよ」

「そんな……」

「それだけなら、僕は死んでしまった家族を死ぬまで家族だと思っていたよ。でもあの人たちは、
金儲けのために僕を売ろうとしていた。その話は偶然聞いたからよく知らないけどね」

「そんなことが」

「だから僕は貴族が嫌いだし、知らなかったとはいえ貴族の血を継いだフェーレさんを助けたくは
ない。でも、フェーレさんが伯爵家に行ったところで、腹いせに孤児院が焼かれることはなんとな

くわかる」

「それなら知らせないと」

「知らせてなんになるんだい？ 僕は手を貸すつもりはないよ」

顔を背けて言ったスクレットさんは、どこか躊躇しているように見えました。だからぼくは、胸を張ります。

「ぼくが、助けます」

「どうして？ きみは、魔獣だ。人間に嫌われているじゃないか。フェーレさんについていったところで、殺されるのがオチだ」

「ぼくは、紳士を目指しているんです。紳士は、困っている人はかならず助ける者です。ぼくが魔獣だとしても、フェーレさんはいま、困っています。だったら助けるのが紳士でしょう？」

「そんな、理由で……」

スクレットさんがなにを躊躇っているのか、少しわかった気がします。彼は紛れもない紳士です。ですが、もつとも護りたかった家族を失い、あまつさえ裏切られてしまったのです。護ることに意味を見失ってしまったのではないのでしょうか。怯えているのではないのでしょうか。

「本当は、理由なんてなんだっていいんです。フェーレさんが作ってくれた料理が美味しかったから、フェーレさんはぼくを見ても優しくかったから、ただ、護りたいからって理由でも、なんだったら理由なんてなくてもいいんです」

そうです、ぼくは紳士に憧れて、紳士になろうとしています。紳士ならこうするだろう、と考える

て、でもやっぱり、ぼくはぼくの意味で、誰かを助けることにしているんです。

「ぼくは紳士を目指しています。見返りとか、お礼の言葉とか、そういうものは求めていません。ぼくは自分が憧れた紳士になりたいだけなんです」

「結果は求めないのか？」

「はい」

「そっか」

それだけ言うと、スクレットさんは黙り込んでしまいました。もう夜も遅いですし、眠ってしまったのでしよう。

*

夜明け前に目が覚めたぼくは、同じように目を覚ましたスクレットさんと一緒に、近くの小川に顔を洗いにきました。

やはりというかなんというか、オークが清潔にしているのはたいそう驚かれるようで、スクレットさんも声こそ出しはしませんでしたが、やはり驚いていました。

入れ替わりでフェーレさんとカリアさんとすれ違い、朝食はスクレットさんが作るようになりました。

質素ながら彩り鮮やかな品々に、フェーレさんも感嘆の声を上げていました。鼻息荒くレシピを

聞くところを見ると、本当に貴族らしくない人です。

朝食を済ませて、フェーレさんとキャリアさんはそろって神妙な面持ちで姿勢を整えました。

「昨日は私事に巻き込んでしまい申し訳ありませんでした。にもかかわらず、命を助けていただき、本当にありがとうございます」

深々と頭を下げたキャリアさんたちに、スクレットさんは頷くだけでした。

重苦しい沈黙を破ったのはフェーレさんでした。

がたりと音を立てて立ち上がったフェーレさんが、泣きそうな顔でほほ笑みました。

「昨日、一晩考えたくは私、やっぱり伯爵家に行こうと思います」

キャリアさんもおそらくは説得したのでしよう。力なくうなだれてしまっている姿を見ると、失敗してしまっただけですね。

「それでいいんですか？」

この四人の中でいちばん関わりが薄いのはぼくです。だからこそ、ぼくはいま一度尋ねました。

「本当にそれでいいんですか？」

「いいわけないだろうっ!？」

「キャリアさんは静かにしてください。ぼくはフェーレさんに聞いているんです」

「待って、キャリア。……本音を言えば、いますぐにでも孤児院に帰りたいです。子供たちや院長先生と一緒に、穏やかに暮らしていきたいです。でも、だけど、私じゃないと、私でないといけないんです。だから、私は行くことにしたんです」

「本意ですか？」

「……それは」

「もう一度聞きます。その選択は、フェーレさんが心から望んだものですか？」

わざわざこんなこと、聞かなくても答えはわかっています。

「……死にたくないよ……みんなのところに帰りたいよお……」

ぼくは紳士失格かもしれませぬ。女性を泣かせてしまったのですから、紳士とは呼べないでしょう。でも、ぼくはそれが聞きたかったのです。

「ではフェーレさん、伯爵家の場所を教えてくださいませんか？ ぼくが、魔獣であるぼくが伯爵家を叩き潰してしまえば誰もが魔獣の仕業だと理解してくれるでしょう」

苛烈といえば苛烈なぼくの言葉に、一切の偽りはありません。そもその原因はフェーレさんが婚姻相手を殺したと思われていることです。それを覆すには、無実だと証明する必要があります。ですが、フェーレさんの味方は貴族側にはひとりしかいません。たつたひとりではどうすることもできないでしょう。

それなら、誰もがわかるように魔獣が暴れてしまえばいいのです。

作戦とも呼べない単純な話を聞いたスクレットさんは苦笑い、カリアさんはなぜかぼくを見つめていて、フェーレさんは哑然としていました。

「確かにそれならフェーレさんの潔白が証明されるね。でも、きみはそれでもいいのかい？ こうして話しているきみには、人間と変わらないだけの知能があるようだ。僕が言わなくても、危険性

は理解しているんだろう？」

「もちろんです。終わったあとのこと、一応予想くらいはしています」

伯爵家を潰すことができれば、ぼくはかならずお尋ね者になるでしょう。人間を襲う危険な魔獣が現われたのですから、ぼくの首に賞金がかけられてもおかしくありません。

「でも、ぼくはやりませよ。もともと人間領に長居するつもりはありませんでしたからね。森の向こうに雲隠れしてしまえば誰も見つけられませんよ」

「だ……だめです、だめですよそんなことっ！ だつてオークさん、それつて私を助けるために貴方が犠牲になるってことですよね……？ そ、そんなのだめですつ、だめなんですつ！」

「べつにフェーレさんを助けるためじゃありませんよ。……忘れたんですか？ ぼくは、本来はオークなんですよ。ぼくはただ、貴方を肉奴隷として残しておきたかっただけなんですよ。フェーレさん、貴女も簡単に騙されてくれましたね」

これだから人間は救えない。なんて、悪どく見えるように言うと、カリアさんが椅子を蹴り飛ばしてフェーレさんを背に庇いました。

そうです、それを求めていたんです。少なくとも、ぼくが目的を果たすまではずっとそうしていただくさい。

やることはやりました。スクレットさんの小屋から出て、伯爵家に向かいます。事前にスクレットさんから場所を聞いておいて正解でした。

*

日が暮れるまで歩いて、伯爵家まで一日と少しという距離でしょうか。ここ数日間ずっと歩き通しでしたが、それだけで疲れるほどやわな肉体ではありません。

なるべく早く伯爵家を壊滅させなければなりません。具体的には、フェーレさんが伯爵家に到着するまでに、でしょうか。

貴族は馬車を使つて移動すると本で読みました。馬の足の速さはよく知っていますのでのんびりしている暇はありません。最低限の睡眠と食事だけをとつてここまで来ました。できるかぎり人目につかないよう動いてきた甲斐あつて、騒ぎにはなつていません。

「それにしても、スクレットさんも無茶をしますね。ぼくについてくるのは自殺行為だと思つて
すが」

「これでも大英雄と呼ばれたこともあるんだ。やわな鍛え方はしてないよ」

さすが劍聖さんといったところでしょか。ぼくがあ的小屋を出て二日ほどの距離を追いついてきたのですから、まさしく英雄の素質がある人間ですね。

「でも、フェーレさんたちは大丈夫なんですか？」

「僕が小屋を出るときに、三日ほど出かけるつてでまかせを言つておいたからその分は遅れているんじゃないかな。あのふたりは律儀で誠実で礼儀正しいから、僕に一言告げてから小屋を出ようとするだろうからね」

なるほど、それは助かります。

スクレットさんの見立てどおりなら、少なくとも三日分の距離は離れていることになります。ぼくたちに追いつくためには途中で馬車を拾わなければ間に合わないでしょうね。のんびりしているわけにはいきませんが、余裕はできました。

そういうえば、結局斧を返し損ねてしまいましたね。話を聞いたかぎりでは、フェーレさんの従者だったカインさんの持ち物らしく、あのカマキリに殺されてしまった人と同一人物でしょう。

フェーレさんに形見を返すのは、これが終わってからにしましょう。代わりに、なんて言えませんが、多少なりともフェーレさんの力になるのであれば、カインさんも形見を使うことを許してくれるのではないですか。

ひとりで黙々と歩いているよりも、誰かと言葉を交わしているほうがずっと精神的に楽ですね。

ぼくもスクレットさんも口数は多いほうではありませんが、彼も不安を覚えているのでしょう。気まづくならない程度に雑談をしているうちに、ようやく、伯爵領へ到着しました。

いまはちょうど深夜なのですが、歩き通した直後に戦闘というのはいささか無理があります。気疲れは油断を生んでしまいますから、少なくともひと眠りはしたほうがいいでしょう。

スクレットさんには宿で眠るように言ったのですが、どこから足がつくかわからないからと言って、野宿を選びました。ここまでずっとフードを被り仮面をつけるほどの力の入れようです。

太陽が昇って、落ちて、月が昇って、落ち始めたころ、ぼくたちは伯爵領へと入り込みました。

スクレットさんが聞き込みをしたところ、領地を統治しているクラピス伯爵はたいへんな浪費家で有名らしく、派手好きかつ見栄っぱりなため、邸宅は領内でも類を見ないほどの大きさのようです。実は領の外から見えていた館こそが伯爵邸らしいです。

そんな両親の背中を見た七人の子供たちもまた、ひどく派手好きで領民から蛇蝎だかつのごとく嫌われているらしいです。五人の息子たちは見栄っぱりで、ふたりの娘は派手好き。次男坊が死んだことに内心では手を叩いて喜んでいるようでした。

こんなところに嫁いでしまえば、フェーレさんもうなるかわかりません。ここは徹底的に、魔獣らしくやりましょう。

巨大な門の前に到着したぼくたちは、ひどく退屈そうにしている見張りの兵士たちを切り捨てる、そのまま門を越えて侵入しました。

広大な庭ですね。花壇や芝生、背の高い木など、センスはよさそうです。足音を立てないよう、慎重に芝生の上を歩いていると、噴水が水を吹き上げていました。大理石を使った噴水はかなりの大きさを誇っています。これだけでも莫大な金銭がかかっていますね。これだけ広い庭を維持するためには庭師を雇う必要がありますし、庭師ならば誰でもいい、なんてわけではないでしょう。邸宅の壁に到着するまで数分はかかりました。全域の広さは推して知るべし、ですね。

レンガで組み上げられた邸宅は見た目どおりに頑丈そうです。見栄を張るためには金を惜しまない姿勢の伯爵家です。ハリポテなんてことはないでしょう。

しかしそれゆえに困りました。レンガは硬く、手持ちの斧では砕くことも難しいでしょう。

「なにも無理に忍び込む必要はないんですよ……。スクレットさん、ぼくはこれから派手に侵入しようと思います。そっちのほうが魔獣らしいでしょうから」

「わかった。確かにそっちのほうが効果的だろうね。どうせなら正面から入ろうか。この扉はすべて高価なガラスで作られているからね。いちばん大きい正面玄関の扉を壊して入ろうか」

「それがいいですね」

やることは簡単です。派手に暴れて、派手に騒いで、犯人がぼくだということを周りの目に焼きつけてしまえばいいんです。たったそれだけのことですが、当然ぼくは追われることになるでしょう。フェーレさんとカリアさんにしつかりとお別れをしたかったのですが、それも叶わないでしょう。

では、いきます。

耳障りな破砕音が夜の町に響き渡りました。

斧を振るってガラス戸を砕き、スクレットさんが邸宅へ飛び込みました。

押し入りは初めてやりますが、目的はひとつだけなので迷うことはありません。まずは手近な寝室へと飛び込んで、見なりのいい人間を探す。そうしてから伯爵家の血筋かを判断して、連なるものなら断絶させる。

シンプルでわからないところなんてありません。

先に邸宅へ飛び込んだスクレットさんが広々とした廊下を右へ、ぼくが左へと曲がって分担しま



第十三章 救出に再会

あれは確かにミュケでした。

小窓から見えただけですが、馬車の中には少なくともぎゅうぎゅう詰めになるほどの人数がいるみたいです。

ミュケは森に住むエルフ族です。いまは同族から追い出されてしまいましたが、本来は森で生まれ森で死ぬ、生まれながらの引きこもり種族といつてもいいでしょう。そんな彼女が自分から外へ、それも人間領へやつてくるなんて考えられません。

あの馬車、鉄でできた頑丈なものです。何人も乗れるほど大きくて、ちよつとやそつこのことは壊れないでしょう。

ほんの一瞬でしたが、ミュケの周りにはさまざまな種族がいるのを見ました。あれが見間違いでなければ、おのずと答えは出ます。

ミュケは、うつむいていました。たぶん、さらわれたんだと思います。

結局、返すことができなかつたこの斧ですが、いまはその存在がありがたい。

ミュケを返してもらいましょうか。

*

鉄の檻を追いかけて、もう二日が経ちました。

御者は鈍いのか、気づいていない振りをしているのか、まったくぼくに意識を向けることなく淡々と馬を操っていました。

野宿する御者が眠っているあいだに馬車の小窓から覗いてみましたが、やはりミュケでした。

汚れてしまった服の裾を伸ばして、同じようにさらわれた人同士でくっついて温め合うミュケをいまずぐにでも出そうと扉に触れてみたところ、外側から鍵がかかっていました。

眠る御者をそのまま気絶させてパンツ一枚にして隅々まで調べたのですが、鉄の箱を開ける鍵はありませんでした。おそらく、目的地に鍵が送られていて、そこで初めて扉を開けるのでしょう。しかしそこはおそらく奴隷商人のようなよからぬ類の人間たちの元でしょう。

扉を破壊することも考えましたが、いかせん鉄では歯が立ちません。このまま尾行して扉が開くまで待つしかないようです。

それにはあまり時間はかからないでしょう。ミュケたちはまったく水や食べ物を支給されていないようです。このまま餓死させるわけはないでしょうし、目的地はそう遠くはないはずです。いまずぐにでも御者に飛びかかってしまいたくなる気持ちをなんとか堪えながら、鉄の檻を見つめています。

さらにそれから半日が経って、鉄の馬車は荒れ道よりもひどい獣道へと分け入っていききました。

山の麓の原生林ですね。あまり深く入り込んでしまうと出られなくなってしまうそうです。ですが、馬車は迷いなく進んでいきます。

おかしいですね。馬車が通っている場所だけは木が生えていません。足元の草は踏み固められていますし、明らかに道として運用されていますね。この先にアジトがつかっているのでしょうか。しばらく進んで、馬車は止まりました。あまり深くは入り込んでいないようですが、周囲は木々の壁になっていて、かろうじて子供が通れるか、というくらいの隙間しかありません。まさに天然の格子といったところでしょうか。内部もこうなっているのであれば、確かに逃げられそうにありませんね。

「あつ、やだよつやだあ！」

「高い金払っただけはある。これだけ瑞々しいエルフは初めてだ。それに……はっはあ！ 処女だ！ やはり初物にかぎるっ」

「ちか、近寄らないで！ あ、れ？ どうしてっ？ どうして魔法使えないの!？」

「おまえはここに来たばかりのようだな？ どうせなにもできないだろうから教えてやる。おまえが着けてる首輪は魔力を断絶する石が埋め込まれているのはわかるよなあ？ だから魔力は遮断されて、お得意の魔法も使えないってわけだ。しかも、それだけじゃないぞ。この石には馬鹿力の魔獣たち用に筋力を抑圧する作用もあるんだぜ。さあて、答えてやったんだからこの処女膜貰うぞお」

「やあ！ た、たすけてっ、たすけてえ！」

そういう仕組みであれば確かにミユケも逃げられませんか。ですがその前に、あのエルフを助けてみましょうか。

個室となっている部屋の前には、見張り役らしき人間がいました。武装は粗末な剣だけで、鎧の類もつけていません。彼らをまとめて両断してから、扉に耳を当てて様子を窺っていたのですが、これ以上はあのエルフがかわいそうですね。騒ぎになってはまずいので、正攻法を使いましょう。

「お楽しみのところ申し訳ないのですが、少々お時間をよろしいでしょうか？」

「なんだっ？ 俺はいま忙しいんだ！ 早くしろ！」

「館長がお客様をお呼びでして……なんでもお支払いいただいた金貨の中に偽物が混ざっているよ
うで」

「なんだと!? 貴様、俺が貧乏人のように偽物をつかませたと思っているのか!? 冗談じゃない、
貴様、名前は!？」

怒声と同時に、扉が勢いよく開きました。

やはり、短気は損気ですね。斧で男の頭をかち割りながらあらためてそう思います。

呆然とぼくを見つめるエルフの少女に、この部屋で隠れているよう伝えようと、がくがくと大袈裟
なほど頷いてベッドの下に潜り込みました。

縁もゆかりもないエルフなので生死にはこだわっていませんが、すべてが終わったあとに生き残
っていれば一緒に連れて帰りましょう。

まだぼくのことには誰にも見つかっていないようですね。完全個別で客を入れていることは好都合
です。ですがあまりのんびりしていられません。もしかしたらミュケも先ほどのエルフ族のように
凌辱されてしまうかもしれません。

同じように見張りをひと息に斬殺し、扉に耳をつけて部屋の様子を窺います。

「あッ、あはっ……そこそこっ、そこが気持ちいいんですう！」

「おーおー、涎垂らすほどいいのか？」

「いい！ いいんですっ！ あ、いく、いっ……」

「つくおおお……やはりこの痙攣の感覚は最高だな」

知る人ぞ知る娼館と云ったところでしょうか。森の奥に店を構えるなんて普通なら考えられないことですが、その娼館がしていることを考えれば町中では営業できませんからね。

拉致に監禁。それも美形ぞろいなエルフ族を中心に、人間で言うところの人型魔獣を。

魔獣を性欲の対象と見るのは、人間ではゲテモノらしいですね。そもそも関わり合いたがらないのが人間です。ですが、人間の性癖とは幅広いらしく、この娼館にも一定の需要があるようです。

この部屋で得るものはなにもなさそうですね。聞いているかぎりでは嫌がっていないようなので、次に行きましょう。

「ひっ、ひいひい！ やめ、やめてくれ！ 殺さないでえええ」

「では、今日新しく拉致してきた者の居場所を教えてくださいませんか？」

「し、知らないっ！ 俺は下っ端なん……ああああっ！ 指、俺の指っむぐ」

「あまり惨たらしいことはしたくないんですけどね。ちゃんと話してくれるまで、あと何本指が飛ぶのでしょうか？ ああ、いっそ指をすべて切り落として口に詰めれば話してくれますかね」

「ひいひいああっ、わかった、話すっ、話すから殺さないでえええげあ！」

「静かにしてください」

手枷足枷をつけられたウエアフォク族の女性を引っ立てている男に尋問した結果、拉致してきた人たちはみな地下牢に入れられているようです。

地下牢への道、鍵のあり方をしつかりと教えてもらうころには男の指が半分ほど飛んでいましたが、約束どおり殺さずに気絶させて先を急ぎます。

男が言っていたとおり、地下への階段は鉄の扉で閉め切られている上に重装の見張りがいますね。気づかれずに一瞬で、というのはいさし難しいです。とはいえ、あまりのんびりしている暇もないので、強行突破しましょうか。

「だれだっ！ なっ、オーク!？」

「どうしてこんなところに!？」

驚きながらも剣を抜いた見張りたちふたりが、一斉に踊りかかってきました。狭い通路に左右から攻められては防ぐことも難しいですね。どちらかひとりとうまく引き離すことができればなんとも……。

「るああお！」

よほど訓練されているのでしょう。連携はばっちりでなかなか隙がありません。逆に、奇をてらつてどちらかを動揺させることができれば連携はたやすく崩れることになります。手の斧をひとりに投げつけて、ぼくはもうひとりのほうへと近寄りました。

「小癩なっ」

斧を弾いたほうを尻目に、待ち構えるもうひとりへ突撃すると見せかけて、剣の届くぎりぎり方向転換して斧を弾いたほうへと体当たりをかましました。

「ふぎゅっ」

壁とぼくに押し潰された男はそのまま崩れ落ちると動かなくなりました。振り返ると同時に剣を拾い、袈裟斬りを紙一重で防いでもうひとりの男を蹴り飛ばします。

したたかに背中を打ちつけた男が動けないうちに首をはねて、ようやくひと息つけました。

ところが、やっとミユケに会えるところまで来たのに、体力の限界が訪れてしまいました。もう何日も歩き通しで、あまり眠ってもいません。ここまで動いてくれたことがもはや奇跡です。どつとのしかかってくる疲労をなんとか堪えながら鉄の扉を押しますが、鍵がかかっているようで開きません。

「いたぞーっ！」

「あいつか?! ってオークじゃねえかよ! なんでこんなところにオークなんか……まあいい、これだけの人数だ、手早く仕留めて後片付け済ませるぞ！」

振り返ると、狭い廊下に順番待ちするように武装した男たちがぼくを睨んでいました。ついに集まってしまいましたね。それにしてもタイムिंगが悪いです。せめてもう少し休憩できたら、切り抜けられるのですが……廊下の角に差ししかかっても続く男たちの列に目眩めまがしました。

「ば、バケモノ……うぎっ」

ようやく最後のひとりを倒して、膝から力が抜けてしまいました。その場に座り込んでしまい、刃の欠けた斧を杖代わりにして寄りかからないと、座っていることさえも難しい有り様です。全身何箇所にも傷があるのかもわからず、手のひらでさえも血まみれでさすがに笑えてきました。

どうせ死ぬなら、せめて最後にミュケを解放してからです。

目の前の扉さえも血まみれで、床には死体だらけで足の踏み場もありません。こんな場所で鍵を探すのは無理ですね。とはいえ、力づくではどうしようもありません。

折り重なった死体から、最初に殺した重装の見張りを掘り起こします。たしか、ふたりほどいたのでどちらかが鍵を持っている可能性があります。どちらも持っていないかもしれませんが。

時間をかけて鍵を探すと、見張りのブーツの中にいくつかの鍵が隠してありました。重い体を引きずりながら鉄の扉にかじりついて鍵穴に鍵を入れて、ようやく開けることができました。

扉に寄りかかっていたせいで開くのと同時に倒れ込んでしまいましたが、もはや起き上がることさえ困難です。芋虫のように這いずり、階段を転げ落ちてまた這いずって、忌々しい鉄格子が見えました。

「あ……う、そ。ルト、なの……?」

「助けにきましたよ、ミュケ」

「ルトおっ!」

鉄格子にしがみついてぼくに手を伸ばすミュケは、少しばかりやつれていましたが元氣そうでした。同じように拉致された人たちが驚くなか、ミュケはぼくを呼び続けています。

「すぐに開けますから……」

「ルト、ルトっ！ 本物だ……ほんもののルトだよお……あ、え？ ルト、怪我してるの？」

地下に光源がないため、ミュケはよく見えていないようですが、さすがに顔付き合わせた距離では気づかれてしまいました。あまり心配させたくなかったのですが、この鉄格子を開けるためにはやむを得ませんね。

「血、血がいつばい……すごい怪我じゃない！ だめっ、動かないで！」

「動かないと開けられませんよ……よし」

すべての鍵を差し込んで試したところ、ようやく鉄格子が開きました。途端に飛びついてきたミュケが目を見開くのと同時に、おそろおそろといった様子でほかの人たちも牢から出てきました。

「すまない、助かったよ」

「とにかく、いまはここから離れましょう。あ、その首輪を壊さないといけませんね。少し失礼して」
驚いたまま固まってしまったミュケをとりあえず離して、引きしまった裸体を堂々と晒すワイルドなウェアアベア族の女性の首輪を引きちぎると、ミュケが我に返りました。

「は、はやく傷を塞がないと……！」

「まだしばらくはもちますから。首輪、壊しますよ」

力自慢な種族に手伝ってもらいながら、全員の首輪を破壊することに成功しました。治癒魔法の達者なエルフがお礼にと傷を治してくれたので、ひとまずミュケは落ち着きました。

あとはここから逃げ出すだけです。私兵たちはぼくがすべて倒してしまつたようで、館の中は静

まり返っていました。中にいた人間はみな逃げ出してしまったようです。

放置されていた馬車があったのでそれに乗り込み、三日後には人間領から出る事ができました。助けた人たち全員に何度も感謝されて、紳士の本懐を遂げたことを実感しました。

いえ、本当はそんなことよりも、ミュケを助けることができてよかったです。

*

いつまで経っても戻ってこないぼくを探して、ヌヌの町を飛び出したミュケは、大森林の境目で人間に捕まってしまったそうです。

魔法の使えないミュケを捕らえた人間たちは、そのまま森から出てくる者たちを次から次へと捕まえていき、あの鉄の馬車に押し込めていったそうです。

捕らえられた人たちはみな、偶然ひとりで森から出ていたようで、抵抗する間もなくあの首輪を着けられてしまったそう。すべてミュケが話してくれました。

心配をかけてしまっているだろうとは思っていましたが、まさかこんなことになるなんて思ってもみませんでした。無事、取り返すことができましたが、あのとき馬車とすれ違っていなければ、ぼくはミュケがどんな目に遭うのかすら知らないままのんびりと森に戻っていたでしょう。

やはり、人間領は危ないところですね。極力近づかないようにしましょう。

放置されていた馬車は四つ、均等に乘る人数を分けて、快適ではないものの、全員が無事に森に

戻ることができました。

ぼくたちは又又の町で馬車を降りましたが、ほかの人たちはそれぞれ自分の住む場所に到着してから降りるようです。

それほど長く離れていたわけではないのですが、「森の出口亭」に到着したときには懐かしさを感じてしまいました。

オリネさんの泣きながらの平手打ちや、クレナルさんの金的蹴り上げには危うく死んでしまうところでしたが、ミュケを助けたことに免じてなんとか許してもらえました。しかし、ミュケがさらわれてしまったのも元はといえればぼくのせいなのですが、自ら藪をつつく必要もないでしょう。

無事、また宿の手伝いをしながら生活する日々に戻ることができました。

しかし同時に、ひとつの悩みが生まれてしまいました。

「んぶつ、んむ……ん、んんっ」

腫れ上がった亀頭に熱い舌を這わせながら、前後に頭を動かしていたミュケが、ふと動きを止めて口を離しました。

「ね、ルト。……入れてほしいな」

拉致されたことがよほどこたえたのか、「森の出口亭」に帰ってきてから頻繁に求めるようになってきたのです。それこそ、人目を憚はばらず、日が高いうちから。

オリネさんの手伝いとして働いているあいだにも、ミュケはさりげなく体を押しつけてアピール



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>